

## 【当日配布資料】

金沢大学連携融合事業「日中両国における無形文化遺産保護と新伝統文化創出に関する共同事業」

(連携先：金沢市、蘇州大学、北京語言大学、四川大学、ユネスコ・アジア文化センター)

シンポジウム：金沢が育んだ加賀宝生の魅力—無形文化遺産の継承を考える— **配布資料**

《金沢市金沢能楽美術館・金沢大学文学部共同開催。於2007年10月6日(土)／金沢21世紀美術館》

「加賀宝生の昭和25年(1950)」【西村聡：金沢大学文学部】

### I. 「金沢市記念文化財／加賀宝生」指定理由書の要点

1. 種類は無形文化財。2. 指定年月日は昭和25年8月21日。3. 保持者の代表は佐野吉之助(明治21年1月6日生、金沢市広坂通り八十番地)

#### 4. 指定理由(原文)

(一) 技術的面 佐野吉之助を中心として、シテ方約三十名は宝生九郎の薫陶のもとによく団結し、加賀宝生の伝統をつぎ、三役はそれぞれ各流儀の中心人物を網羅し、当地のみの演能にはことかゝぬ状態である。

(二) 物的面 能楽堂(建坪二二七坪)は昭和七年の新築で、戦後佐野吉之助の寄贈を受けて、財団法人、金沢能楽会を組織し、その維持保存につとめている。なお能面、能衣裳、古文献等貴重な資料を保管所蔵して演能に使用している。／明治三十四年以来、毎月、月例演能発表会を催し、会員約六百名を有している。

5. 補助金は毎年24万円。 (上は戦後第一回金沢能楽会番組『金沢能楽会百年の歩み』上巻所収)

### II. 「金沢市記念文化財／加賀宝生」指定の背景

昭和20年11月4日＝金沢能楽会定例能再開(金沢能楽堂)。【大阪では9月9日に勤労学徒慰安能、東京では9月16日に能楽協会第一回定式能。宝生流月並能の再開は昭和21年1月から。】

昭和22年5月15日＝大野湊神社神事能復活。【清水九郎「大野湊神社の御神事能」『加越能楽』

4 所載は「奈良の芝能につぐ」歴史を自負。興福寺新能が復活するのは昭和26年4月1・2日。『能』5-5 (昭26・5)「展望」記事は「無形文化財保存顕揚のため」「奈良県の手」により復活したと伝える。】

昭和23年4月17・18・25日＝2世佐野吉之助還暦記念能。【宝生重英父子来演。】

昭和23年11月3日＝2世佐野吉之助、金沢市文化賞(前年制定)を受賞。

昭和24年4月2・3日5月22日＝佐野舞台建設五十年記念能。【宝生宗家はか東京勢来演。】

昭和24年5月7日＝兼六園野外能。【石川県社会教育課との共催。3,000人とも1,000人とも。全国的には劇場・大ホール・野球場も利用されている。】

昭和24年6月＝雑誌『加越能楽』創刊(～翌年4月の11号まで。編集兼発行川岸一郎)。【『能』創刊は昭和22年、『梅若』は昭和23年、『観世』『喜多』は昭和24年、『金剛』は昭和25年、『宝生』は昭和27年、『金春』は昭和32年の復刊、『能楽タイムズ』は昭和27年創刊。金沢での雑誌創刊は明治44年の『能楽時報』(～大正2年)以来。】

昭和24年7月28日＝金沢市文化財保存選奨条例公布。

昭和24年7月＝【梶谷厚「能界管見」『加越能楽』2 所載は、能楽の維持保全策として、金沢市による財政援助を求め、「日本の能楽都市」たることを提案。】

船 弁 慶	宝生 渡邊 重英 良雄	花 月 佐 野 友 吉	月並能番組
間 梅田 源二 之吉 殿村 製作	新保 洲一 郎 金洲 鳳文	山下 谷下 長初 造一	昭和二十年十一月四日(第一日曜)午後一時半始
住飯 駒島 政次 六	片岡 阿彌 吉二	藤田 又八	
金澤能楽會			

昭和 24 年 10 月 16 日＝宝生重英九郎襲名祝賀能。

昭和 24 年 12 月 22 日＝金沢能楽会規約改正及び役員改選。【月例研究発表会（定例能の呼び方を翌年 1 月からこう改称）に宗家から権威者を招いてその指導を受けること、年数回の公開能を催し一般への普及を図ること、能楽堂を関係事業に公開することなど。】

昭和 25 年 3 月＝宝生会水道橋能楽堂再建舞台披露。【4 月に大阪・山本能楽堂、5 月に東京・代々木舞台落成。】

昭和 25 年 5 月 23・24 日＝京都薪能（主催京都市・京都能楽会、協賛平安神宮）。【明治神宮の東京薪能、奈良・興福寺の薪能は翌年から。】

昭和 25 年 5 月 30 日＝文化財保護法の公布。

昭和 25 年 8 月 21 日＝加賀宝生を金沢市記念文化財に指定。【1 生「水辺の草」『加越能楽』3 所載は、「加賀宝生今や流儀職分だけでも二十名余り、其外囃子方、脇、狂言方それぞれ中央の先達に其指導を仰いで研鑽怠りなく流友又巷に溢れる現状は蓋し宝生流は勿論のこと他流に於ても東京以外地方ではこうした豪華版は全国絶対に其比を見ずと云ふもおそらく過言ではあるまいと思ふ。まして況んや戦後全国一の折紙付の金沢能楽堂を持ち、加ふるに佐野家所蔵の能装束類の完備陳に至つては加賀宝生ならではの感も亦深い。」と記す。下線部は指定理由書に近似する。】

昭和 25 年 8 月 29 日＝東京文化財研究所の前身、国立博物館附属美術研究所、文化財保護委員会の附属機関となる。【東京文化財研究所となり、美術部・芸能部・保存科学部・庶務室が置かれるのは昭和 27 年 4 月 1 日。】

昭和 25 年 11 月 1 日＝京都国際文化観光都市建設法公布記念祭・京都薪能（平安神宮）。

昭和 26 年 2 月＝【黒田吉夫「金沢能楽会の新発足」『加越能楽』改め『五雲』2 所載は、「その人口に比して能を愛し顔をたしなむ人士の多いことにおいて、石川県が全国一であると言つても過言ではない。また金沢能楽堂は現存する全国の能楽堂の中で最も優秀なものとせられ、面装束、造り物や小道具、能に関するいろいろな文献などが揃つて立派に保存せられているのは共に偉大なる郷土文化の誇りと誇ることが出来るわけで」云々と記す。下線部は指定理由書に近似する。】

昭和 26 年 4 月＝財団法人金沢能楽堂を設立。【財団法人金沢能楽堂寄附行為第一章総則第二条「この法人は郷土文化財たる金沢能楽堂の維持保存に力めると共に之が活用をはかり以て能楽の振興に寄与することを目的とする。」『加越能楽』各号には「戦後国宝的となつた金沢能楽堂」、「現在日本でも一、二位といわれて居る此の能楽の殿堂」等の表現が散見する。「謡曲人口日本一」の自負の形成とも連動するらしい。】

昭和 26 年 11 月 4 日＝能楽協会北陸支部結成記念能。【他に支部は東京・名古屋・大阪。】

昭和 26 年 12 月 14 日＝NHK 金沢放送局から放送劇「加賀宝生」を全国にラジオ中継。【翌年 5 月には北陸文化放送開局記念招待中継能。定例能を NHK と北陸文化放送が交替で中継することを決定。】

昭和 27 年 3 月 30 日 4 月 5・6 日＝金沢能楽会創立五十周年記念能。【設立は明治 34 年(1901)】

\* 広坂の金沢能楽堂から石引の石川県立能楽文化会館（昭和 61 年に石川県立能楽堂と改称）への移転・移管は昭和 47 年。国立能楽堂の開館は昭和 58 年。金沢能楽美術館の開館は平成 18 年。

### Ⅲ. 「加賀宝生」の変遷

#### 1. 「加賀宝生」以前

(1) 豊臣秀吉・前田利家時代＝秀吉、金春安照をひいき。一利家、安照の子七郎氏勝をひいき。

(2) 2 代前田利長＝地元の諸儀・波吉両大夫を召し抱える。（金春流）

(3) 徳川秀忠・3代前田利常時代＝北(喜多)七大夫の絶頂期。秀忠・家光の御成に備え、利常、竹田権兵衛(金春氏勝三男)を抱え、慶応の番組は北七大夫を中心に構成。

## 2. 「加賀宝生」の始まり

(1) 徳川綱吉・5代前田綱紀時代＝貞享3年(1686)4月3日、綱紀、上意により江戸城で能「桜川」を舞う。綱吉は宝生大夫友春をひいき。綱紀もこれを機に宝生分家嘉内家を抱え、諸橋(金春一喜多一)・波吉(金春→親世一)を宝生へ転流させる。さらに御細工者には本務の外に謡や囃子を兼芸として課し、演能のための人材を確保。一方、京都の竹田権兵衛の勧進能も援助し、「加賀の金春」が語られた(井原西鶴『世間胸算用』)。

## 3. 「加賀宝生」の隆盛

(1) 徳川家斉・12代前田斉広時代＝家斉は宝生大夫父子(英勝・邦保)を得軍能指南役に任ずる。宝生流謡本の刊行。一斉広、文化7年(1810)の祝式能・慰み能、御書物奉行佐久間寛台『謡言粗志』を執筆。

(2) 13代前田斉泰時代＝弘化5年(1848)宝生大夫父子(後に金沢に退隠する紫雪)江戸で勧進能興行。明治の古老たちが回顧する「全国に冠たる加賀宝生の隆盛」はこの頃のこと。

## 4. 「加賀宝生」の語の使用

(1) 文献上の初出(今のところ) 明治30年(1897)9月、北國新聞連載、佐久間夢裡「波吉甚次郎氏を訪ふ」に4度出る。【山森育親「加賀宝生と佐野吉之助」は宝生紫雪金沢退隠以前には「加賀宝生」の語は使用されなかったとする。】

(2) 狭義と広義①狭義にはシテ方宝生流の東京謡に対する金沢謡。【背景には金沢に退隠した宝生紫雪の流れを自負する地元の人々とその子宝生九郎知榮(明治能楽界を代表する名人)に入門するため上京した人々との間の確執がある。しかし知榮没後、金沢ゆかりの重英が家元を相続した大正6年(1917)以来、対立は解消に向かう。】②広義には「金沢の能楽」全体。シテ方の謡に限らない。【今日、金沢能楽会定例能のポスターには「加賀宝生能」が使用される。】

## IV. 再び昭和25年前後へ

### 1. 人的資源の評価

(1) 保持者の代表は佐野吉之助。①金沢市記念文化財「加賀宝生」は宝生流のシテ方が代表する。「指定理由書」ではシテ方約三十名がいること、宝生九郎の薫陶のもとに団結し、かつ加賀宝生の伝統をついでいることを挙げる。②しかし能楽はシテ方だけで上演できるものではない。「指定理由書」では三役(ワキ方・囃子方・狂言方)もまた各流の中心人物を網羅し、要するにシテ方と併せて、能楽上演のために必要な、かつ十分な水準の人材(能楽師)が地元で揃うことを挙げる。【つまり「指定理由書」は保持者の代表を宝生流シテ方佐野吉之助としつつ、広義の「加賀宝生」を指定対象としている。】\*現在においてもシテ方・三役のすべてに重要有形文化財総合指定「日本能楽会」会員がいる。能楽師の数については下の参考資料参照。

(2) 加賀藩時代の金沢や現代の大都市では役ごとに複数の流儀の能楽師がいる【つまり現代「加賀宝生」の一役一流は「団結」しやすい規模と見える。】

①加賀藩末期の金沢の主な役者たちとその流儀。\*京都・江戸にも御手役者がいたが省略する。  
【シテ方】諸橋・波吉(宝生流)。【ワキ方】柳川・野村(宝生流)。竹中(春藤流)。金堂(進藤流)。  
【笛方】葛田・木野(森田流)。藤田(一噌流)。【小鼓方】三須(幸流)。後東(幸小左衛門流)。上山(幸清次郎流)。湯浅(親世流)。【大鼓方】小杉(石井流)。敷村(金春流)。飯島(葛野流)。【太鼓方】藤本(親世流)。竹内(金春流)。【狂言方】日置・吉沢(大藤流)。野村・豊屋(和泉流)。大場(寛流)。

## ②現代の金沢能楽会の諸役の流れ（上のゴシック体の流れ）

《参考》能楽師在住地の分布（「能楽協会会員名簿（2002年7月現在）」を整理。

	シテ方	ワキ方	笛方	小鼓方	大鼓方	太鼓方	狂言方	計
1	東京 297	東京 20	東京 20	東京 21	東京 14	東京 16	東京 41	東京 429
2	京都 102	兵庫 11	京都 7	京都 8	京都 7	京都 6	京都 16	京都 150
3	大阪 78	神奈川 5	福岡 5	大阪 6	大阪 7	福岡 4	神奈川 13	大阪 112
4	愛知 71	愛知 4	愛知 4	福岡 5	福岡 5	大阪 4	福岡 11	愛知 96
5	神奈川 64	京都 4	石川 4	石川 4	神奈川	岡山 2	大阪 10	福岡 91
6	福岡 61	大阪 3	大阪 4	兵庫 3	愛知 3	熊本 2	愛知 9	神奈川 87
7	兵庫 59	愛媛 3	富山 3	愛知 3	石川 2	石川 2	兵庫 7	兵庫 84
8	埼玉 47	石川 3	奈良 3	広島 2	滋賀 2	愛知 2	埼玉 7	石川 60
9	石川 39	埼玉 3	岡山 2	福井 2	兵庫 2	以下略	石川 6	埼玉 59
10	千葉 37	以下略	兵庫 2	愛媛 2	以下略		滋賀 5	千葉 40
11	奈良 29		広島 2	岐阜 2			富山 4	奈良 37
12	長野 23		神奈川 2	奈良 2			大分 4	滋賀 25
13	滋賀 17		以下略	以下略			奈良 3	長野 23
14	広島 14						三重 2	富山 21
15	富山 12						千葉 2	広島 20
	以下略						以下略	以下略
計	1124	63	63	64	48	42	143	1547
	観世 579	宝生 27	森田 43	幸 31	高安 13	金春 26	大蔵 89	
	宝生 265	高安 18	一増 16	大倉 17	大倉 12	観世 16	和泉 54	
	金春 122	福王 18	藤田 4	幸清 9	葛野 12			
	金剛 97			観世 7	石井 10			
	喜多 61			観世 1				

（西村聡『金沢能楽会を事例とする近現代能楽史の地方展開についての研究』平成13年度～平成15年度科学研究費補助金（基盤研究（C）（2））研究成果報告書、2005年5月、第六章「空から顔が降るということ」から）

## 2. 物的資源の評価

（1）金沢能楽堂＝雑誌『能』（社団法人能楽協会発行、昭和22年1月～昭和28年12月）の「能楽堂案内」欄には次のように各地の能楽堂の所在が掲載され、その数は年々増加する（再建されたものだけでなく、金沢能楽堂のように健在ながら掲載が遅れたものも含まれる）。

東京＝染井能楽堂（豊島区駒込）・多摩川能楽堂（大田区田園調布）・山本東次郎舞台（杉並区和田本町）／京都＝金剛能楽堂（中京区室町四条上ル）・大江能楽堂（烏丸二条東）／大阪＝大槻能楽堂（東区上本町）【以上3-1から掲載】金沢＝金沢能楽堂（広坂通八〇）【3-4から掲載】福岡＝住吉能楽堂（住吉神社境内）【3-7から掲載】熊本＝藤崎宮舞台（井川瀬町）／札幌＝中島公園舞台【以上3-11から掲載】神戸＝元町能楽堂（省線元町駅高架下）【4-1から4-7まで掲載】東京＝水道橋能楽堂（文京区元町）・代々木能舞台（渋谷区代々木山谷町）／大阪＝山本能楽堂（東区徳井町）【以上4-7から掲載】東京＝藤波舞台（新宿区下落合）【4-10から掲載】＊現在、『能楽手帖』記載の能舞台は全国に77カ所。

（2）能面・能装束・古文書等貴重な資料＝能面・能装束は金沢能楽美術館へ。

## V.「加賀宝生」の継承保存と普及振興

### 1. 社団法人金沢能楽会定款

第3条 この法人は、加賀宝生の継承保存と、能楽の普及振興をはかることを目的とする。

第4条 この法人は、前条の目的を達成するために、次の事業を行なう。

(1) 会員の定例研究発表会の開催 (2) 能楽知識普及のための公開能の開催 (3) 能楽に関する講演会及び研究会の開催 (4) 後進の指導育成のための能楽教室の開設 (5) その他、この法人の目的達成に必要な事業

### 2. 石川県立能楽堂の自主事業（石川県立能楽堂『三十年のあゆみ』から）

(1) 芸能文化の講演と鑑賞会 (2) 芸能講座 (3) 能楽講座 (4) 子供謡・狂言・仕舞教室 (5) 能楽師養成 (6) 抹茶席 (7) 芸能双書 (8) 県民移動能 (9) 観能の夕べ

### 3. 金沢能楽美術館の設置目的（同館「施設概要」から）

金沢の伝統芸能である加賀宝生の貴重な美術品その他の能楽に関する美術品等を収集し、保管し、及び展示し、並びに伝統芸能等の自主的な学習、研修等を行う場として利用に供することにより、能楽の継承を図り、文化の振興に資するため、能楽美術館を設置。

4. 大学コンソーシアム石川平成19年度シティ・カレッジ科目「金沢で学ぶ能楽入門」（提供機関金沢大学）の案内【参加教育機関の単位互換授業。一般にも開放。】

1. 《敷居が高い》ではなく《敷居が多い》と考える。(1) 詞章＝文学、囃子＝音楽、面・装束＝美術、など。(2) 観客としての楽しみ。鑑み、鑑み、鑑み、楽しみ。／2. 《金沢の能楽》を《敷居》として《金沢で学ぶ》。(1) 《金沢の能楽》を《金沢で学ぶ》。(2) 《金沢の能楽》から《能楽入門》。／3. 《能楽の全体》を《自分の身体》で感じ取る。(1) そのために見る＝鑑しや展示。(2) そのために歩く＝施設やゆかりの地。【科目開発：後藤祐自・佐々木香織・西村聡（授業担当）】

第1回	4月19日	能楽という言葉の起こりと金沢	前田齊泰「能楽記」から	近代・総合
第2回	4月26日	空から響く降る街	兼六園と成発閣	近代・文学
第3回	5月10日	城下町金沢の音風景	観音院・東山界隈	近世～・音楽
第4回	5月17日	加賀宝生の意味とその変遷	金沢能楽美術館で何を学ぶか	近代・美術
第5回	5月24日	シテ中心主役と三役	古典芸能継承の秘密	中世～・総合
第6回	5月31日	面・装束の遺産	石川県立美術館の収蔵品から	近世・美術
第7回	6月7日	能楽の舞台と鑑し	金沢城と石川県立能楽堂	近世～・総合
第8回	6月14日	四百年続く演能の伝統	大野湊神社からの展望	近世～・総合
第9回	6月21日	加賀藩御細工所と兼芸	伝統工芸と伝統芸能	近世・美術
第10回	6月28日	金谷御殿から尾山神社へ	前田家愛好の歴史	近世～・総合
第11回	7月5日	金沢能楽会の百年	近代能楽史の地方展開	近代～・総合
第12回	7月12日	能「安宅」と喝るはの流	伝承地を金沢に求めて	中世～・文学
第13回	7月19日	泉鶴花と金沢の能楽	照葉狂言の盛衰	近代・文学
第14回	7月26日	探訪・観覧の体験を発表する	.....	.....
第15回	8月2日	期末試験	.....	.....

—無形文化遺産の継承を考える—  
囃子を中心に

二〇七/一〇/六

高桑 いづみ

東文研・無形文化遺産部

太鼓方金春流又右衛門家 三男三郎右衛門

大藏流 大藏源右衛門

敷村鉄太郎娘婿・石浦他吉↓宮増豊好

けこゝ神屋轉合で形一該所高々  
 がさ〜ん此は指環と花の色要  
 種變樹れ〜り也生者必滅の世は  
 らい突あめ〜ある程ひ  
 (熊野)

(熊野)

(田村)

れ佛力かた

(田村)

[illegible]

		甲 ノ オ ロ シ	
○—	●—ル	—ト	—1
○—	●—ラ	●—	—2
ハ オ		ヒ	オ
○—ヒ	●—	●—ア	ヒ—3
	サ		
—ラ	●—ヒ	—ラ	イ—4
○	ヤ	●	ヒ
○—イ	●—イ	●—ト	ア—5
イ	ヒ		
○—ホ	○—ホ	●—ラ	ラ—6
	ハ		
○—ウ	○—ト	●—ト	ト—7
初	ハ		
ヒ	イ		
—ヒ	○—リ	—ラ	ロ—8

唐舞二段才口シ

一唱流